四帝仁宗出生故事考

——赤脚大仙轉生の話——

堀　誠

一

五代切っての名君と稱される後周の世宗が沒して幼主恭帝が即位すると、翌年、陳橋驛（開封の北郊）において殿前都點檢（近衞軍總司令官）の趙匡胤が天子に推戴されて、後周の讓りをうけた。時に九六〇年、國號を宋と改め開封に都した太祖（趙匡胤）は、天下の統一に力を盡くし、その大業は弟の太宗のときに完成されるにいたる。國の基礎が定まり、世も太平の時代に入ると、やがて大中祥符の天書事件で名高い眞宗のあとを承けて、四帝（第四代）仁宗の治世がおとずれる。

仁宗は、仁恕をもっては宋朝第一と聞えた英明君主である。學問を好み、漢の蔡邕の始めた飛白の書法に秀でていたといい、そのもとには名臣名儒が輩出して、いわゆる慶曆の治を現出した。その故に、仁宗朝は北宋時代の盛世とも稱され、その明君の像と治世の太平とは、通俗文學の世界でも顯彰される。たとえば、『喩世明言』第十一巻の「趙伯昇茶肆遇仁宗」と題した話本——科擧に失敗して落魄の趙旭（字は伯昇）がお忍びの仁宗皇帝に巡りあい、思いもかけず西川五十四州都制置に任ぜられたという「一子皇恩を受け、全家天祿を食」する發跡變泰（立身出世）の物語——には、身の不明から下第となった不遇の人材を登用するにいたる仁宗の仁恕と恩德のある姿を見ることができるのである。

ところで、この仁君の生いたちには、ある祕密があった。史の傳えるところによれば、大中祥符三年（一〇一〇）四月十四日、仁宗は李宸妃を母として誕生するが、生後まもなく、皇子のなかった章獻明肅劉皇后によって養育されることにな

った。このことは嚴重に祕されたため、仁宗は劉皇后を實母と信じて疑わずに成長し、出生の眞相を知ったのは、二十數年後の明道二年（一〇三四）劉皇后が沒したときのことで、李宸妃はこの前年すでに歸らぬ人となっていた[1]というのである。まさしく認母の悲劇である。この一件は、小說戲曲の好箇の題材となったようであり、『元曲選』所收の「抱粧盒」、『明成化說唱詞話叢刊』所收の包公ものの一篇「新刊全相說唱足本仁宗認母傳」、『龍圖公案』の代表的な一篇「桑林鎭」、揚州平話の代表的演目「天齊廟包公斷太后」、はては『三俠五義』第一回のいわゆる「狸猫換太子」故事に、それぞれ趣向をこらして敷衍されている。ここに通俗文學の多樣化した世界の一面を見ることができるが、仁宗の出生に關してはそれとは別に、天上界の赤脚大仙が臨凡轉生したのであると語った故事も存在する。

登場人物の前身轉生の關係を物語ることは、數多くの作品に見られ、通俗文學には付物であるといっても過言でないほどである。たとえば、元の至治年間（一三二一—一三二三）に刊行された『全相平話三國志』では、有名な司馬仲相の斷獄の話によって、三國志の英雄豪傑たちは漢王朝を建てた君臣たちの、すなわち蜀の劉備は彭越、魏の曹操は韓信、吳の孫權は英布、後漢の獻帝は高祖、伏皇后は呂后、蜀に仕える諸葛孔明は蒯通、魏に仕える司馬仲達は司馬仲相自身の、それぞれ投胎出世と說かれている。この話が獨立して一篇の話本になったとも思われる『三國因』や『喩世明言』第三十一卷の「鬧陰司司馬貌斷獄[2]」にいたっては、さらに張飛は樊噲、關羽は項羽の投胎出世などとも加えている。『三國志通俗演義』の成立にあっては、「實七分、虛三分」といわれることと關わるのだろうか、この轉生說は切り捨てられたようだが、同じく明の長篇小說である『水滸傳』には、梁山泊に集結した好漢一百八人は天界の星が世に臨んだものともいう[3]し、『西遊記』の玄奘三藏は釋迦如來第二の弟子の金蟬長老の轉生ともいう。仁宗を赤脚大仙の轉生とするのは、こうした所說のなかのほんの一例にすぎないが、思うに、この所說は必ずしも**いいわれ**なしとしないようである。また、その轉生のことはひとつの故事を通して說かれているが、それは複數の明淸の通俗小說のなかに見られるものであって、それぞれがほぼ同じ內容で構成されていることが特異な現象でもある。

本稿では、この通俗小說中の故事を探り、故事の形成展開の樣相を考察してみたい。

二

仁宗を赤脚大仙の轉生であると説く故事は、どのような内容で構成されているのか。明清の通俗小説のなかから、具體的に紹介してみる。

まず『水滸傳』である。第一回に先立つ「引首」には、太祖の宋朝開創の話に始まり皇位が太宗・眞宗を経て仁宗に繼承されたことをいうと、「這仁宗皇帝、乃是上界赤脚大仙」(4)と説いて、その誕生直後の話を展開しはじめる。――(仁宗皇帝の)降生のみぎりは、晝も夜も泣きやまなかったので、朝廷では黄榜を掲示して治療する者を求めると、それが天宮に通じて、太白金星がこの世に遣わされた。金星は翁に姿をかえ、歩みよって掲示をはがすと、皇子のおむずかりを治せますと申し出る。見張り役が宮中に案内し眞宗にお目通りさせると、聖旨がくだり、内苑に通って太子を診察せよとのこと。翁はまっすぐ宮中に入ってゆき、太子を抱きあげ、耳もとでひそかに八字をささやけば、たちまち太子は泣きやんだのである。翁は名も告げず、一陣の清風と化して去ったが、耳もとでいかなる八字をささやいたのかというと、「文有文曲、武有武曲(文に文曲有り、武に武曲有り)」といったのである。確かに、玉帝は紫微宮の二星を下界にくだして、この天子を補佐させた。文曲星とは、南衙すなわち開封府の長官・龍圖閣大學士の包拯、武曲星とは、西夏國征討軍の大元帥の狄青である。このふたりの賢臣があらわれて天子を助けたのであると。つづいて、仁宗が三登の世(天聖元年から同九年を一の登、明道元年から皇祐三年を二の登、皇祐四年から嘉祐二年を三の登とする)をものし、その天下の太平なりしことを賛美すると、樂しみ極まれば苦厄おとずれるの例子あるがごとく、思いがけず嘉祐三年の春、天下に悪疫が漫延し、そのためにやがて三十六員の天罡星と七十二座の地煞星とが世に臨み、趙宋を大波亂に巻き込むことになると暗示して、第一回の情節へと導いている。ここでも、仁宗は五穀豐登の泰平天下をきずいた英明君主と形象化されているが、そのいわれを説き明かしているのが轉生にまつわる一件といえよう。

『水滸傳』のほか、明末の馮夢龍の増補になる『平妖傳』四十回本の第十四回、大中祥符僞作の罪狀で追われる張大鵬が張鸞と名を變えて江湖を遊歴するうち、眞宗の太子が成長したことを耳にするくだりにも、「那皇子乃是赤脚大仙轉生。怎見得?」と説話(講釋)獨特の饒舌な口調で語りだすと、『水滸傳』「引首」とは異なる内容の見える故事を展開しは

じめる。——もともと眞宗は二十一歳で即位したが、宮中になお皇嗣がなかった。そこで御製の祈願文を天下に頒布し、各所の名山宮院に命じて齋を修め醮を設け、玉帝に（皇子の誕生を）祈願させた。その時、玉帝は折しも仙人たちと會合していたが、「誰か行ってくれるものはないか」との下問に、仙人たち誰ひとりとして答えない。ただ赤脚大仙だけがちょっと笑ったので、玉帝は「笑った者はどうしてもその情(こころ)があるようだ」として、すぐに宮中に生まれかわって李宸妃の子となるように命じたのである。このあとには、誕生した皇子が晝夜にわたって泣きやまなかったが、とある道人から「莫叫、莫叫、何似當初莫笑！[5]（お泣き召さるな、お泣き召さるな、それなら初めから笑わないことです）」とささやかれると、ピタリ泣きやみ、道人は清風と化して去るにいたる『水滸傳』「引首」にあったような內容が展開し、次のように結んでいる。この皇子は誰かといえば、四十二年間太平を保ち道を行なった仁宗皇帝である。この皇帝は宮中にて赤脚(はだし)を好み、靴や韈を着用するのを嫌ったが、これは（前世が赤脚大仙であった）その驗(しるし)である。かくして、眞宗は齋醮の靈驗に感じていよいよ信心深く、各所で道家の廟宇を修復したのであると。この故事には眞宗の祈子の一節が設定されていて、『水滸傳』「引首」の故事よりも話としての擴がりをもっている。また、仁宗が赤脚大仙の轉生であったという證據として、仁宗が宮中で赤脚を好んだことが擧げられているのも興味深い。

もう一つ、清の呂熊の『女仙外史』第一回冒頭、主人公の唐賽兒が月世界の嫦娥の轉生であると說くなかで、そのような轉生の例としてまず『平妖傳』のと同じ內容で構成された故事が擧げられている。紙幅もあるから改めて引用はしないが、ただ道人が太子に言い聞かせたことばは、「莫叫、莫叫、何似當年莫笑、文有文曲、武有武曲、休哭、休哭」というもので、先の二つの故事に見えたことばを折中した如き內容になる。また、果たして太子が泣きやんだことのあとには、この皇子がのちの仁宗皇帝、道人は太白金星であり、そのことばにあった文曲星とは文彥博、武曲星とは狄青のことで、ともに仁宗の政治を補佐する將相であったと結んでいる。この故事にも、『水滸傳』のように仁宗を補佐する文武の臣が擧げられているのである。

さて、紹介してきた三つの故事には、字句の異同はもちろん、內容上の差異も認められるが、いずれも仁宗が赤脚大仙の轉生であると說いた故事である。以下にこの故事の源泉をたずねてゆくが、ひとまず故事の先後關係を押さえておくこ

とが必要と思われるから、『水滸傳』・『平妖傳』四十回本・『女仙外史』という三つの長篇小說の成立刊行の狀況について觸れておく。

まず、『平妖傳』は仁宗の慶暦七年（一〇四七）河北の貝州に起きた王則の反亂を敷衍している。その四十回本は、馮夢龍（一五七四―一六四六）が羅貫中の編次になるという二十回本に增補改作の手を加えたもので、引用した部分は全文新稿になる章回中の一節である。わが內閣文庫に藏される『天許齋批點北宋三遂平妖傳』が初刻原本であって、その冒頭にある趙无咎の序の日附から、泰昌元年（一六二〇）の成立刊行といわれている。『女仙外史』は、明の永樂十八年（一四二〇）山東省蒲臺縣に起きた唐賽兒の反亂および靖難の變を題材にした長篇小說で、成立に關しては呂熊の晩年、康熙四十三年（一七〇四）秋に脱稿され、七年後の同五十年（一七一一）に上梓されたらしいという(6)。『平妖傳』『女仙外史』に對して『水滸傳』は、繁本簡本に關する複雜な問題を內在しているが、古くは郭勛の刊行したという嘉靖本の殘本あり、萬曆年間に入ると、容與堂本・天都外臣序本(7)といった百回本、袁無涯の刊行した百二十回本など、その代表的版本が出揃ってくる。史的にみると、『水滸傳』の『平妖傳』『女仙外史』に先行し、『女仙外史』の最も新しい成立になることが明らかになろう。ここに故事の先後關係も知られるが、それを踏まえて內容上の相互關係を詮索するのは、性急にすぎるし且つまた當面の問題でもない。ともかく、ここに知り得た先後關係を念頭に置いて、故事の周邊から探源してゆく。

三

宋の仁宗朝といえば、明の郎瑛（一四八七―一五六六）がいくつかの證據に基づき「小說」の起源ありと說いた時代でもある。『七修類稿』卷二十二に、郎氏は次のようにいう。

小說は宋の仁宗より起こる。蓋し、時に太平長久、國家閑暇にして、日に一の奇怪の事を進ぜしめ、以て之を娛しまんと欲す。

「小說」とは講唱文藝としての小說を指すようであり、その仁宗朝起源說の證據として、小說では「得勝頭廻」（まくら）のあとに「話說、趙宋某年」と講釋しはじめること、閭閻で行われる陶眞の起にも「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」と語ること、明初の瞿佑（字は存齋）の詩句「陌頭盲女無愁恨、能撥琵琶說趙家」にみえる「趙家」とは趙宋を指すこと、以上の三件を擧げている。しかし、證據は確證たるには不充

分なもので、逐一反論を加えていけば、郎氏の所説はもろくも瓦解することになるが、それはそれとして、ここで注目したいのは、郎氏が證據のひとつに擧げた「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」という陶眞の文句である。[8]

一九六七年に上海嘉定縣の宣氏の墓から發見された明の成化年間（一四六五—一四八七）所刊の説唱詞話本が、現在『明成化説唱詞話叢刊』という書名を冠して影印出版されているが、その中に次に擧げるような包公ものが含まれている。

新刊全相説唱包待制出身傳
新刊全相説唱包龍圖陳州糶米記
新刊全相説唱足本仁宗認母傳
新編説唱包龍圖公案斷歪烏盆傳
新刊説唱包龍圖斷曹國舅公案傳
新刊全相説唱張文貴傳
新編説唱包龍圖斷白虎精傳
全相説唱師官受妻劉都賽上元十五夜看燈傳 上巻・全相説唱包龍圖斷趙皇親孫文儀傳 下巻

右の主人公は、仁宗朝の清官で名裁官とうたわれる包拯その人であり、彼による懸案事件の解決が話の本題となる。しかし、その開場導入部では各篇ともに時の皇帝である仁宗のことを持ち出し、その治世の太平を贊美するのである。その展開形式はほぼ各篇に共通するもので、その中には「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」なる宋朝第三代までの廟號を重ね、第四代仁宗には「有道君」の美辭を付け加えたような七言二句が、確かに存在するのである。すなわち、仁宗を持ち出してくる句がそれであり、その句やその類句を承けて直後に現れてくる句は、仁宗の身のいかなるかを説いていて注目すべき内容を含んでいる。そこで、仁宗を持ち出してくる句とそれを承ける句とを摘記してみる。

○『新編説唱包龍圖公案斷歪烏盆傳』
太祖太宗眞宗帝　四帝仁宗有道君
四十二年眞命主　佛補天差治萬民

○『新編説唱包龍圖斷白虎精傳』
太祖太宗眞宗帝　四帝仁宗有道君
四十二年眞命主　佛補天差有道君

○『新刊全相説唱張文貴傳』
太祖太宗眞宗帝　四帝仁宗有道君
四十□□□□□　經過幾度拜郊恩

○『全相説唱師官受妻劉都賽上元十五夜看燈傳』
太祖太宗眞宗帝　四帝仁宗有道君

仁宗七寶眞羅漢　佛補天差治萬民

○『新刊説唱包龍圖斷曹國舅公案傳』

太祖太宗眞宗帝　四帝仁宗有道君
仁宗七寶眞羅漢　兩班文武上方星

以上は「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」を含んだものだが、他の三種には次のようにある。

○『新刊全相説唱包龍圖陳州糶米記』

太祖太宗王有道　眞宗三帝改咸平
四帝仁宗登寶殿　佛補天差羅漢身
仁宗七寶眞羅漢　二班文武上方星

○『新刊全相説唱包待制出身傳』

休唱三皇并五帝　且唱仁宗有道君
四十二年爲天子　經過幾度拜郊恩

○『新刊全相説唱足本仁宗認母傳』

太祖太宗眞宗帝　仁宗天子治乾坤
一十二歳登金殿　萬民安業立明君

成化年間所刊の包公ものでは、「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」やその類句によって仁宗が持ち出されると、多くの場合、仁宗そのものについて「四十二年眞命主」もしくは「仁宗七寶眞羅漢」と語り、さらに「佛補天差治萬民」とか「兩班文武上方星」とかいう句へ續いていることが知られる。仁宗はこのようにして形容顯彰されているが、とりわけ目を惹くのは「仁宗七寶眞羅漢」という句である。それに相對する句である「四十二年眞命主」は、仁宗が四十二年にわたり世を治めた眞命天子であることを表すようだが、「仁宗七寶眞羅漢」はどのように解釋したらよいのだろうか。

いささか検討してみるならば、「四十二年眞命主」「仁宗七寶眞羅漢」という二通りの句をともに承けている「佛(保)補天差治萬民」もしくは「佛補天差有道君」は、佛如來と天帝の派遣補佐をうけて仁宗が世を知ろしめすことを説いていよう。また「仁宗七寶眞羅漢」の方は、文武の臣が天上界の星の降生であることを説いた(二)「兩班文武上方星」でも承けられていて、兩句は相對する關係にある。こうした點から考えると、「仁宗七寶眞羅漢」は、單に仁宗を羅漢の身に見立てて表現したものでなく、仁宗が羅漢の化身であったことを象徴的に説いているのではないだろうか。羅漢はこの世にあって衆生を濟度するというから、五穀豐登の天下をものした明君仁宗は、かかる羅漢の現じた身そのものであると考えられ、このような句が生まれてきたものと思われる。

『明成化説唱詞話叢刊』所收の包公ものの開場導入部に

は、仁宗を赤脚大仙の轉生と説くのと相似た意味をもつ「仁宗七寶眞羅漢」という句のあることを知ることができたが、この導入部では、仁宗の身がいかなるかを説き明かすと治世の太平が贊美され、ほとんどの場合、「文官只說包丞相、武官只說狄將軍」というような句によって文武の名臣の名も擧げられている。文官の包丞相とは、いうまでもなく主人公の包拯を指し、さらには「日判陽間夜判陰」「有人犯到包家手、拔樹連枝要見根」という句によって、その名裁判官ぶりが形容されることもある。以上のような內容の展開形式は、すでに示した仁宗を赤脚大仙の轉生であると說いた故事のなかで、とりわけ『水滸傳』のそれに類似したところがあろう。成化年間に刊行された說唱詞話本を考察することによって、『水滸傳』をはじめとする三つの小說に少しく先行する時代の樣相を知ることができたが、赤脚大仙の轉生とする所說自體にはいまだ行きあたらない。

四

この故事をさらに探ってゆくうえで、もう一つ觸れておきたいことがある。『平妖傳』『女仙外史』に先行すると認められる『水滸傳』の「引首」では、ひとり仁宗のみを天上界の神仙の轉生と語っているのではないのである。

そもそも「引首」は、「試看書林隱處、幾多俊逸儒流」にはじまる詞、「紛紛五代亂離間、一旦雲開復見天」にはじまる詩のあと、その詩が邵堯夫の作で五代の兵亂を嘆じたものと說きだすと、やがて、太祖趙匡胤が洛陽の甲馬營に誕生したとき、赤光が空に輝き芳香が夜もすがらたちこめたが、これぞ天上の霹靂大仙の降臨であったと物語るのである。つづいて、太祖が一條の桿棒を手にして天下を統一したこと、西嶽華山の處士陳摶が「天下此れより定まる」と豫言したという逸話を展開し、在位の十七年は天下太平と說くと、

傳位與御弟太宗、太宗皇帝在位二十二年、傳位與眞宗皇帝、眞宗又傳位與仁宗、這仁宗皇帝、乃是上界赤脚大仙、降生之時晝夜不啼哭[9]……

と皇位の繼承を傳えて、まっすぐに仁宗を赤脚大仙と說いた故事へと入ってゆくのである。

このように、『水滸傳』では宋朝の初代太祖と四代仁宗をそれぞれ霹靂大仙と赤脚大仙の轉生としているのである。このことを『水滸傳』の演變という觀點から探ってみてると、內容的にそのすべてが『水滸傳』の形成成立に關係をもったわけでないが、その藍本とも目される『大宋宣和遺事』に

は、趙匡胤を霹靂火仙の轉生と語る一節が設定されているのである。

冒頭から久しく歴代興亡のことを、とりわけ淫逸に耽った無道の帝王を中心にして展開し、「今日話説的也説一箇無道的君王……」と説くと、五代離亂の苦しみを嘆いた後唐の明宗（李嗣源）の祈りが天に通じて、火德星君霹靂火仙が洛陽甲馬營の趙洪恩の家に降生することになったと物語る。つづいて、その子趙匡胤が天下を統一したこと、在位の十七年は天下太平であったこと、そして位を繼いだ太宗が隱士陳摶に宋朝の命運を問うたところ、陳摶は「一汴、二杭、三閩、四廣」と豫言して默したという逸話を繰り廣げると、ただちに、

太宗之後、傳位於眞宗・仁宗・英宗幾箇賢君

と皇位の繼承を傳えて、一足飛びに第五代皇帝英宗の治平年間の逸事へと發展しているのである。

さて、『水滸傳』と『大宋宣和遺事』の情節内容を對比してみると、太祖を霹靂大(火)仙と説いて宋朝の開創のことを物語るのは、双方に共通することが明らかである。火德星君については、明の田汝成の『西湖遊覽志』第十二卷「南山城内勝蹟」のなかに、

火德星君廟、大火爲宋分野。宋以火德王、故南渡後建廟於此、以奉熒惑之神。……

とあり、また趙太祖の出生については、『新編五代史平話』の「五代唐史平話」卷下や『喩世明言』第十四卷の「陳希夷四辭朝命」などにも説かれているが、その身が霹靂大仙の轉生であるとする所説は情節化していないようである。このことによれば、太祖を霹靂大仙とする設定に關しては、『大宋宣和遺事』と『水滸傳』とが内容的に連關するものであると考えられてくる。しかし、片や仁宗のことになると、『大宋宣和遺事』には具體的に一言も費されていないのであった。『水滸傳』の演變という觀點から仁宗を赤脚大仙の轉生と語る故事を考えてみるとき、些細ながらも、ここに故事の源泉をたずねる理由がまた一つ生まれてくるのである。

五

明清の通俗小説に出發して、『明成化説唱詞話叢刊』所收の包公ものや『大宋宣和遺事』を探ってみたが、さらに溯って宋の人の著した筆記隨筆類には、この故事を考察するのに見逃すことのできない話が見られる。

宋・張端義の『貴耳集』卷中および同じく趙溍の『養痾漫筆』には、次のような話が収められている（引用は後者に依

る)。

本朝の四帝も亦た吉符有り。……眞宗久しく子無し。方士を用って拜章し上帝に至らしむ。有る所の赤脚大仙微笑す。上帝卽ち大仙を遣はして嗣と爲さんとす。大仙之を辭するに、帝曰く、當に〔幾〕箇の好人を遣はし去きて相輔贊せしむべしと。仁宗禁中に在りて、未だ嘗つて鞋はかず。惟だ殿に坐するに、方めて鞋襪を御し、扆より下れば卽ち之を去る。(〔 〕内は『貴耳集』により補う。)

冒頭にいう「本朝の四帝」とは、宋の眞宗・仁宗・徽宗・高宗の四人の皇帝を指し、引用したのは仁宗の誕生を記した部分である。この話には、仁宗の誕生後のおむずかりの一件は設定されていないし、また『貴耳集』のものには、赤脚大仙が微笑したことにより上帝が皇嗣として遣わそうとするにいたる一節を缺いている。内容上の過不足があるにはあるが、これぞ明清の通俗小說中にみた故事の先蹤話であると認めることができよう。仁宗が鞋襪を嫌ったという終わりの一節は、仁宗が赤脚大仙の轉生であったことの證據として說かれているようだが、これは後世の『平妖傳』の故事にも見られたものである。

因みに、時代は下って清代、褚人穫の『堅瓠六集』巻四「赤脚大仙」には、次のようにある。

宋の眞宗子無し。嘗つて宮中に於いて天に祈り嗣を求む。上帝以て諸眞に問ふに、唯だ赤脚大仙一笑するのみ。既にして宮人李氏、仁宗を誕生す。既に生まれて哭き止まず。眞宗榜を通衢に掲げ、能く太子の啼哭するを止むる者有らば、之に厚賞せんとす。道士有り、闕に至りて云ふ、能く兒の啼くを止むと。眞宗召し入るれば、手を以て之を撫して曰く、(5)叫く莫かれ、叫く莫かれ、何ぞ當初笑ふこと莫きに似んと。哭くこと遂に止む。少時、宮中に在りて着する所の鞋襪悉く之を去る。禁中皆呼びて赤脚大仙と爲す。(下略)

褚人穫は淸初の人で、康熙十四年(一六七五)の刊刻になるという『隋唐演義』の作者としても知られ、右の話には眞宗の祈嗣と誕生した皇子のおむずかりの件が設定されているから、時代的にも内容的にも、通俗小說中の特に『平妖傳』と『女仙外史』に見られた故事に近いものといえよう。

先蹤となる話のほかに、もう一つ、内容的に興味ある話がある。宋・王明清の『揮麈後錄』巻一の「昭陵降誕之因」がそれである。

章懿李后(李宸妃)初め側微に在りて章獻明肅(劉皇后)に

事へしとき、章聖(眞宗)偶々閤中を過ぐるに、盥水せんと欲す。后(李宸妃)洗を捧じて前む。上其の膚色の玉耀なるを悦び、之に言を與ふ。后奏す、昨夕、忽ち一羽衣の士を夢む。跣足にして空從り下りて、來りて汝の子と爲らんと云ふと。時に、上未だ嗣有らず。之を聞くに大いに喜び、云ふ、當に汝が爲に之を成さんと。是の夕、召幸せられて娠有り。明年、昭陵(仁宗)を誕育す。昭陵の幼年、履襪を穿く毎に、卽ち亟かに脫ぎ去らしめ、常に禁掖を徒歩す。宮中皆呼びて赤脚仙人と爲す。蓋し、赤脚仙人、古の得道の李君なり。

標題にいうように仁宗の誕生の因縁を説いたものだが、すでに紹介した話とはまったく趣向を異にする。李宸妃の懐妊については「召幸有娠」とあるから、現實性を免れないが、その夢の一件によって、仁宗は夢に現れたという羽士の生まれかわりではなかったかと豫感される。しかも仁宗が履襪を嫌ったとあって、『堅瓠六集』の話にあったように、そのために赤脚仙人の異名をとったと結ばれているから、これも仁宗が赤脚大仙の轉生であると説いた話の一種と見ることができる。

さて、『貴耳集』を著した張端義(字は正夫)は孝宗の淳熙六年(一一九七)の生まれで、蘇州に住まったが、理宗の端平年間(一二三四―一二三六)三たび詔に應じて上書するも、かえって罪を被り韶州(廣東省曲江縣)に貶謫された。『貴耳集』巻中は、淳祐四年(一二四四)配流先の韶州で成ったという。[10] また、『養疴漫筆』を著した趙溍(字は元晉)は趙葵(一一八四―一二六六)の子で、度宗の咸淳年間(一二六五―一二七四)建寧府の知事をつとめたという[11]から、張端義のほぼ一世代あとの人である。一方、『揮麈後錄』を著した王明清(字は仲言)は、『默記』を著した王銍の子で、高宗南渡の建炎元年(一一二七)の生まれ。のち寧宗の慶元年間(一一九五―一二〇〇)嘉興(浙江省)に寓居したというが、沒年は未詳。『揮麈後錄』は光宗の紹熙四年(一一九三)あるいは五年、明清六十七、八歳のころに成ったという。[12] したがって、張端義・趙溍・王明清ともに、少しく相前後するが南宋の人である。彼らの手になった筆記隨筆に上記の話が收載されていたことによれば、少なくとも彼らが生きた南宋の時代には、早くも仁宗を赤脚大仙の轉生とする二種類の話が行なわれていたといえよう。ここに、明清の通俗小說中の故事は一擧に南宋の時代にまで溯ることができたのである。

六

南宋の人の筆記隨筆のなかに收載されていた話には、仁宗の鞋韈嫌いのことが、すでに『平妖傳』や『堅瓠六集』の話に先んじて說かれていたようである。それは、仁宗が赤脚を好むという性癖の持主であったことを傳えるものであるが、『貴耳集』や『養痾漫筆』にある話のみならず、『揮麈後錄』にあるそれとは別の話においても、等しく說かれているのである。この雙方に等しく說かれているという事實によれば、こうした二つの話が生まれてくる根底には、ひとつに仁宗の赤脚嗜好がその要因として關わっていたと思われるのである。それに加えて、仁宗について探ってみると、赤脚嗜好と連關するのかは不明ながら、新たに次のような姿も現れてくるのである。『宋史』卷十二、仁宗本紀の「贊」にいう。

仁宗、恭儉仁恕、天性に出づ。一たび水旱に遇へば、或は密かに禁廷に禱り、或は殿下に跣立す。

仁宗は「恭儉仁恕」の四字をもって稱贊されているが、大水・旱暵が起ると、人知れず宮中に祈禱を捧げ殿下に跣立するとは、人民の苦しみを思いやる爲政者の實像を傳えた事象にほかならない。

仁宗の仁恕の表徵ともいうべき祈禱者の姿は、宋・司馬光の『涑水記聞』卷五の次のような記事に、より具體的に窺うことができる。

嘉祐元年正月甲寅朔、上(仁宗)大慶殿に御し朝會に立杖す。前夕、大いに雪り、宮架を壓し折るに至る。上禁庭に在りて跣もて天に禱る。旦に及びて霽る。百官就ち到りて、旣に簾を捲けば、上は暴に風眩を感じ、冠冕側に欹る。左右復た簾を下す。或るひと、指を以て上の口を抉りて涎を出すに、乃ち小愈す。復た簾を捲き、趣(いそ)ぎ禮を行ひて罷る。

嘉祐元年(一〇五六)元旦、仁宗が大慶殿に出御し朝賀をうけたことを記すが、ここに、前夜降りしきる大雪を憂慮した仁宗が嚴寒を冒して禁廷で跣足の祈禱をささげたこと、しかも天候が回復したことを知ることができる。司馬光(一〇一九―一〇八六)は寶元初年(一〇三八)の進士で、仁宗・英宗に仕え、神宗のときに王安石の新法を議して退き、哲宗の初年ふたたび仕えて新法を改めたという、舊法黨の中心人物である。その著に『資治通鑑』のあることは周知の通りで、引用した『涑水記聞』には、太祖から神宗にいたる宋朝の舊事が錄されている。その記事は彼自身が直接に見聞したものと思

われるから、先の『宋史』に記されていたことがらとこの記事とを重ね合せてみると、仁宗が水旱や降雪に際して跣足で祈禱する姿は、より一層現實性をもって傳わってくる。この跣足の祈禱は、爲政者としての姿を傳えるもののようであるが、そもそもこの姿を目にした近臣ら第三者には、仁恕の爲政者なればこその慈愛にあふれた所行と映ったのではなかろうか。この祈禱は赤脚の愛好と直接的には連關しないが、少なくともはだしになるという點だけは、互いに共通している。こうしてみると、仁宗の跣足の祈禱も赤脚の嗜好とともに、故事の源泉を考えるうえで閑却できないことがらであると思われる。

　仁宗の爲政者としての一面を垣間見たが、では、仁宗に生まれかわったという赤脚大仙は、いかなる神仙であるのか。知り得たところをいささか述べるならば、通俗小説のなかには、仁宗の前身としての姿のほかに、また新たな姿を見ることができる。『西遊記』第五回、蟠桃會に招待されていないと知った齊天大聖孫悟空が、西王母の住む瑤池に直談判に向かう一節。折しも蟠桃會に赴く途中の赤脚大仙は、式次第が變更になったという悟空の眞赤な嘘に、見事だまされていて、その箇所には、「大仙是個光明正大之人、就以他的誑語作眞」という説明的なことばが加えられている。ここに見る赤脚大仙のひととなりは、眞宗の皇嗣降誕の祈禱が天にとどいたとき、玉帝の前でニッコリ笑ったために轉生を命ぜられたという話に、相通ずるところがあろう。また同じく『西遊記』第二十二回、沙悟淨がわが身の上を語ったことばによれば、天界の捲簾大將であった彼が、西王母の蟠桃會の席で玉玻璃をこわして殺されそうになったとき、その命を救ってくれたのが赤脚大仙であったとのことである。意外にも、赤脚大仙は玄奘三藏の三弟子のうち悟空と悟淨の二人と因縁淺からぬ神仙であったわけであり、その意味では、『西遊記』の物語とも深い關連のある神仙といえよう。また、先に引用した『揮麈後錄』の話の末尾に、「蓋し、古の得道の李君なり」とあったが、それは太上老君を指していったものであろうか。ともかく、南宋の人の筆記隨筆に記されるところである。このほか、明の公案書である『新刻海若湯先生彙集古今律條公案』巻四「淫僧總類」の「蔡府尹斷和尚姦婦」によれば、明の洪熙年間、閩嶺（福建）の水雲寺では、寺内に求嗣壇を設け、祈れば赤脚禿頭仙のご利益で子が生まれる云々と稱していたということが知られる。赤脚禿頭仙とは、眞宗の祈願に應じて赤脚大仙が遣わされたことに着目し、その名に因

んで命名された神さまであるらしい。もっとも、赤脚禿頭仙とは、實は夜な夜な參籠の婦女子に忍びよる邪淫の僧たちであったというから、不埒きわまりなく、赤脚大仙にとっては迷惑千萬な話であったといえよう。この赤脚大仙の素性については、いまだ詳らかにならないが、ただその名前は、私見のかぎりでは南宋の人の筆記随筆にはじめて現われてくるようであるから、あるいは仁宗の誕生にまつわる例の話とともに、大いに賣り出した神仙であったのかもしれない。

七

すでに指摘してきたことがらを踏まえて、話の源泉とその形成展開の様相についてまとめておきたい。

奇行異癖は、その人物にまつわる異聞逸話を生みだす一箇の母胎となろう。南宋の人の著した『貴耳集』『養痾漫筆』『揮塵後錄』に収載されていた話には、後世の『平妖傳』や『堅瓠六集』の話にも見られたように、仁宗が鞋韈の着用を嫌ったことを等しく説いていたが、これは仁宗のひとつの性癖と認められるものであり、赤脚を好んだことをいうにほかならない。たとえ鞋韈を穿いてもすぐさま脫ぎ去ってしまうとか、出御に際して着用しても事がすんでしまえばすぐさま脫ぎすてるとかになると、それは奇癖というべきものに相當すると思われる。事實の確めようはないが、この奇癖のことが宋代の話以來記されているという事實によれば、仁宗を赤脚大仙の轉生とする所說もしくは話そのものは、ひとまず、仁宗のこのような奇癖を背景として芽生えてきたものでなかったかと考えられる。しかし、立ちかえってみるに、『揮塵後錄』と『堅瓠六集』の話に、例の奇癖に由來して宮中では赤脚仙人と呼んだとあったことによれば、本來、宮中で仁宗の奇癖に由來して赤脚仙人の異名がつけられ、あるいは赤脚大仙の轉生とする所說も、その異名のことが人の口から口へと傳えられてゆくうちに、轉化してきたものであったかも知れない。それというのも、赤脚好きの故に赤脚仙人とする異名の命名法は、ごく自然で往々にして有り得べきものと思われるからである。

仁宗については、奇癖のほかに、天候の調節（請雨・止雨など）を願って跣足の祈禱をささげる姿も顯現してきたのである。この祈禱のことは、『涑水記聞』と『史記』の記事に知ることができ、後者においては明らかに仁宗なる爲政者の仁恕の姿を傳える事象として擧げられていることによれば、仁宗の場合、跣足で祈禱し殿下に跣立することが、爲政者の姿

として特に象徴的で不可分のものであったものと考えられる。古來、旱嘆に際して、爲政者が自らの身を天にさらして降雨を請うことが行なわれたようであり[13]、仁宗の跣足の祈禱も、こうした天候の調節を願う爲政者の祈りに連關するものであろう。そして、その祈りに際しての跣足は、第三者の視點に立てば、仁宗が天に祈りを通じ、天候の調節といういわば民衆の生命にも關わる公的なことがらを天に請願する上での不可缺な手段であるが如くに映ったものではなかったろうか。『涑水記聞』にいうように、仁宗の祈禱のあと天候が囘復した如くであれば、なおさらその感を強くしたにちがいない。世俗にも跣詣（はだしまいり）があるにはあるが、その願掛けの意味とは明らかに次元を異にするものである。こうしてみると、話自體に説かれている仁宗の奇癖のみならず、この跣足の祈禱も、赤脚大仙の轉生とする所説もしくは話そのものが生まれてくるのに、大いに與っていたのではないかと推測される。その意味では、仁宗を赤脚大仙の轉生とすることは、何の理由もなく附會されたものでなかったといえよう。

これに加えて一言しておきたいのは、眞宗の祈嗣のことについてである。實は、仁宗は眞宗の第六子であったが、その兄にあたる皇子たちは、仁宗誕生の大中祥符三年（一〇一〇）より前に夭折していたようである[14]。また眞宗は道教の信奉者で、仁宗の誕生に先立つ大中祥符元年（一〇〇八）、天書を僞造し泰山に封禪したこと、その翌年には有德の道士を集めて齋醮の儀式を行ない、その後十數年を費して道藏を編纂させたことは[15]、周知の通りである。このことによれば、眞宗の祈嗣のことが設定されているのには、それだけの要素が存在していたと見ることもでき、事實そうした祈禱が行なわれるようなことがあったのかも知れない。こうしてみると、眞宗が皇嗣に恵まれず、また道教の信奉者であったことも、仁宗を赤脚大仙の轉生とする所説が生まれ話が形成されてくる上で、すでに指摘した跣足の祈禱と赤脚の嗜好と相俟って、もう一つの要因として關わっていたようにも思われる。

さて、通俗小説中の故事に先行する話が南宋の人の筆記隨筆に存在したことによれば、仁宗を赤脚大仙の轉生と説く話は、遲くとも南宋のころには形成されてきていたように考えられる。では、時代的にどこまで溯れるかというと、嘉祐八年（一〇六三）に仁宗が沒してのちなのか、在世中なのかは詳らかにしないが、かなり早い時期に赤脚大仙の轉生とする相傳相承が生まれていたと思われる。なぜかといえば、赤脚仙人の異名のことの見える『揮麈後錄』にあった話との相互關

連は不明ながら、赤脚大仙の轉生と稱されてくるだけの理由が、仁宗の側に備わっていたと考えられたからである。おそらく、相傳相承は喧傳されて、あるいは、金の抑壓下におかれた南宋の人々が天下太平なりし北宋のころ、とりわけその盛世とも稱される仁宗の治世に想いを馳せて語ったものであったかも知れない。さらにはまた、宋代流行の説話（講釋）の席上でも、何かの折に何かの形で説話人（講釋師）の口舌にのぼっていたのかも知れない。ともかく、この仁宗を赤脚大仙の轉生と說く話は、後世の通俗小說の世界へと受け繼がれ、思うに、誕生後のおむずかりを太白金星が遣わされて泣きやませるにいたる通俗小説流の一節もさらに添加されて、仁宗を語りまた顯彰するなどの目的で『水滸傳』『平妖傳』『女仙外史』のそれぞれの情節のなかに定着してきたのであろう。また、それに少しく先行する成化年間所刊の說唱詞話本の包公ものにあった「仁宗七寶眞羅漢」も、おそらく仁宗を赤脚大仙とする所説と何らかの絡まりがあり、根本にあっては源を同じくするものでないかと思われる。

羅漢の轉生について付言しておくならば、中國の一休和尚とも稱すべき南宋の濟顚和尚にまつわる俗語小說の『錢塘湖隱濟顚禪師語錄』や『濟顚禪師大傳』（全二十回）第一回「靜中動羅漢投胎、來處去高僧辭世」において、濟顚は紫脚羅漢の投胎とされている。[16] その冒頭、ひそかに投胎のことを知った天台山國清寺の法空長老が天台縣の李茂春の家に生まれた赤子、すなわち後の濟顚を抱いて、「你好快脚、不要差走了路頭」といったところ、その子はただ「微微笑」したとあり、赤脚大仙の轉生の話を想わせるところがある。のみならず、後世の通俗小說『濟公全傳』[17]の第一回「李節度拜佛求子、眞羅漢降世投胎」ともなると、その降誕した赤子が泣きやまないのを性空長老が泣きやませるという一節に轉化している。ここに至っては、明らかに赤脚大仙の轉生の故事を奪胎したものであり、その故事の餘響とみることができる。

明清の通俗小說中に見える故事をめぐって溯源し、話の源泉とその形成展開の様相の一端を考察してみたが、赤脚大仙の生まれかわりであったという仁宗は、嘉祐八年（一〇六三）四十二年の治世をもってこの世を去る。唯一『平妖傳』四十回本では最終回の末尾に、その夜、仁宗が福寧殿に沐浴して跣足になると、奄然として崩じたことを傳えて、「滿宮中都聽得仙樂嘹喨、異香馥郁、仍歸赤脚大仙之位矣」と結んでいる。この結末とともに、赤脚大仙の轉生の話も終結するといえよう。

〔注〕

(1)『宋史』仁宗本紀、同巻二四二・李宸妃傳、『宋史紀事本末』巻二四「明肅莊懿之事」などによる。

(2) 小川陽一『三言二拍本事論考集成』において同氏は、『三國因』(『罕本中國通俗小說叢刊』第一輯)が『三國志平話』と『喩世明言』をつなぐ作品らしいことを指摘している。そのほか、『新編五代史平話』の「五代梁史平話」巻上の冒頭にも、韓信・彭越・陳豨がそれぞれ曹操・孫權・劉備に轉生したことが見える。

(3) 太田辰夫〈『西遊記』雜考〉(『神戸外大論叢』第三十二巻第三號)第Ⅰ節「金蟬子」に、金蟬子は金色の禪者の意を表す「金禪子」が正しく、禪を蟬とするのは、玄奘に生まれかわったことを「金蟬脫殼」にたとえることから生じたのであろうという指摘がある。

(4) (9)參照のこと。

(5) 釋大典『詩語解』巻上では、「何似」を「有相比之義、有不及之義」と解しており、さらに後の『詩家推敲』巻上では、「何如、何似トモニイヅレノ義アリ、ナンゾシカンノ義アリ」と解している。

(6) 三木克己〈「女仙外史」と幸田露伴の「運命」〉(『中國文學報』第三册、のちに『中國文學論集』所收)の指摘による。

(7) 天都外臣(汪道昆)の序には「萬曆己丑(一五八九年)孟冬」の日附があるが、現存本は清代に入っての石渠閣補刻本である。

(8) 澤田瑞穗〈「四帝仁宗有道君」——明代說唱詞話の開場慣用句について——〉(『中國文學研究』第四期、『宋明清小說叢考』所收)ではすでに、郎瑛の立てた小說仁宗朝起源說の證據自體が薄弱であることを指摘し、「太祖太宗眞宗帝、四帝仁宗有道君」という陶眞の文句が『明成化說唱詞話叢刊』所收の包公ものの詞章に含まれていることに注目して、その所說が短絡的な附會になることを詳說している。また、ほぼ時を同じうして發表された尾上兼英〈成化說唱詞話試論㈠——花關索傳をめぐって——〉(『東洋文化』第五十八號)においても、陶眞と說唱詞話に關する指摘がなされている。以下の包公ものの考察においては兩論文、とりわけ前者に負うところが多い。

(9)『李氏藏本忠義水滸全書』(いわゆる楊定見本)を底本とした『一百二十回的水滸』(一九七八年、商務印書館重印)による。ただし、天都外臣序本を底本とする『水滸全傳』(一九五七年、中華書局刊)には、「傳位與御弟太宗卽位、太宗皇帝在位二十二年、傳位與太子卽位、這朝皇帝乃是上界赤脚大仙、降生之時、晝夜啼哭不止……」とあり、一見したところ「這朝皇帝」は眞宗のことのように受けとれるが、それが仁宗を指していることは、以下に展開する内容から明らかである。

(10)『四庫全書總目提要』巻一二一、子部三一・雜家類五によ

る。

(11)『四庫全書總目提要』巻一四三、子部五三・小說家類存目による。

(12)『四庫全書總目提要』巻一四一、子部五一・小說家類二による。

(13) 出石誠彦〈上代支那の旱魃と請雨——その說話と事實と——〉(『支那神話傳說の研究』所收)の第三節「請雨の習俗」に詳しい。

(14)『宋史』巻二四五・宗室二に、「眞宗六子、長溫公禔、次悼獻太子祐、次昌王祗、次信王祉、次欽王祈、次仁宗。禔、祗、祈皆蚤亡、徽宗賜名追封。悼獻太子祐、母曰章穆皇后。咸平初、封信國公。生九年而薨。……」とある。ただし、第四子の信王祉については、「禔、祗、祈皆蚤亡」とあるばかりで、特に觸れられていない。

(15) 眞宗による道藏の編纂の經緯については、吉岡義豐『道教經典史論』第一編第七章「宋代の道藏」第二、三節、窪德忠〈宋代における道教とマニ教〉(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、のちに『中國宗教における受容・變容・行容』所收)第二節に詳しい。

(16) 濟顚和尙については、澤田瑞穗〈濟顚醉菩提について〉(『天理大學學報』第三十一輯、のち『佛教と中國文學』には〈濟顚醉菩提〉と題して所收)の論考がある。『錢塘湖隱濟顚禪師語錄』は、『大日本續藏經』第一輯第二編第二十六套第一册および路工編『明淸平話小說選』第一集(一九五八年、古典文學出版社刊)に所收のもの、『濟顚禪師大傳』は、民國七十年、佛教出版社文山精社刊本による。

(17) 民國五十五年、文化圖書公司重印本による。

〔附記〕

本稿は、昭和五十六年十二月二十二日(火)、東京都立大學において開催された白話小說研究會の第二回談話會の席上、「宋朝仁宗と赤脚大仙」と題して行なった口頭發表を骨子とし、加筆したものである。